ことばと真理

――アウグスティヌス『教師論』における問題の所在――

中川純男

本書において、あるいは本書に記された対話において、アウグスティヌスの意図した結論が3であることは、この著作におけるアウグスティヌスのことばからも、『再考録』の証言からも、明らかである。

問題はむしろ、この概略から見て取られるように、1と2との関係である。なぜなら、一見する限り、「しるしなしには何も教えられない」という主張と、「しるしによっては何も教えられない」という主張とは、互いに相容れないと思われるからである。じじつ、アウグスティヌスも、その対話相手であるアデオダトゥスも、「しるしによっては何も教えられない」という主張が、直前に確認された「しるしなしには何も教えられない」という同意を覆すも

第一章　全体の構成

『教師論』は、息子アデオダトゥスとの対話という形で書かれている。全体の構成を概略的にまとめれば次のようになる。

	章、節
序　何のためにはなすのか。	一、一―一、二
1　しるしなしには何も教えられない。	二、三―一〇、三
2　しるしによっては何も教えられない。	一〇、三―一〇、三五
3　教えるのは内なるキリストのみである。	二、三六―一四、四六

のであると考えている。しかし、量的に見れば、本書の三分の二は1の立場を確立するための対話に当てられているのであるから、この部分の議論が結論である3の論点に何ら貢献していないとは考えにくい。われわれは、1および2の議論の提起する問題点を明らかにした上で、3の結論がどのような哲学的意味を内包しているかを考えることにしたい。

第二章　XをYによって示す

1の議論の発端は、ことばはしるしであると同意した後、アウグスティヌスがウェルギリウスの詩の一節を取り上げ、そこに用いられている単語それぞれが何を表示しているか答えるよう、求めたことにある。アデオダトゥスが詩の三番目の語について、「ex は一種の分離を表示している」と答えたとき、アウグスティヌスはしるしによってしるしを解説するのではなく、これらのことばがそのしるしである「ことがら」res を示してくれるように ut ostenderes と求める（二、四）。「われわれは話しているのだから、ことばなしに答えることはできない」と抗議するアデオダトゥスに、アウグスティヌスは「壁とは何か」と問われて、指で指し示す場合を例に挙げる。このとき、確かにことばなしに示してはいるが、しかし指で指し示すこともしるしの一つであるから、やはりしるしなしに示されるものは何もないと主張するアデオダトゥスに、アウグスティヌスは「歩くとは何か」と問われ、直ちに立ち上がって歩いてみせる場合を例に挙げる。ただし、すでに歩いているとき、「歩くとは何か」と問われるなら、足を早めるなど「歩くこと」とは別のことを付け加えなければ、問うた相手は答えが与えられたとは思わないであろうし、「歩くこと」とは別のことを付け加えるなら、相手は歩くことを正確に理解しない可能性がある。したがって、現に行っていることはしるしなしに示すことはできない。

ここに当面の同意が、アデオダトゥスの口から述べられる。「行いうることで、問われたとき行っていないことについて問われるなら、問われた後、そのことを実行するという仕方で、しるしによらず、ことがらそのものによって re ipsa、問われたことを示すことができる。」（三、六）ただし、アデオダトゥスはその例外として、すなわち、問われたときに行っていてもしるしなしに示すことができること

として、「話すこと」を挙げている。話しているとき、「話すこととは何か」と問われるなら、話すことを続けながら、相手に答えることができる。したがって、話すことは、ことがらresそのものとは別のしるしを必要とすることなく、教えることができると言うのである。

このアデオダトゥスの答えを得て、アウグスティヌスは、以下の議論の枠組みとなる分類を提案する。何かを示すということは、次の三つの場合に区分される。

	論じられる箇所
a　しるしによってしるしを示す。	四、七―六、一八
b　しるしによってことがらを示す。	八、三―九、二六
c　ことがらによってことがらを示す。	一〇、二九―一〇、三〇

aの「しるしによってしるしを示す」とは、いささかわかりにくい表現であるが、これは「話し続けることによって話しとは何かを教えることができる」という、アデオダトゥスの答えをアウグスティヌスが修正した上で、言い換えたものである。すなわち、「話すとは何か」を話しながら説明するとは、「話す」ということばをことばを用いて説明することであると理解した上で、「しるしによってしるしを示す」場合としているのである。アデオダトゥスは、これを「しるしなしにことがらそのものを示す」ことができる場合の一つと見なしていたが、その点をアウグスティヌスは修正しているのである。しかしこの時点で、アデオダトゥスが、この修正の意味を十分に理解しているとは言えない。bの「しるしによってことがらを示す」場合については、さしあたり説明の必要はないであろう。cの「ことがらによってことがらを示す」場合が、「歩いて見せる」ことのように、実演することによって教える場合である。以下、この三区分が、順番に論じられることになるが、じっさいには「しるしによってしるしを示す」場合が、もっとも丁寧に論じられている。

この三区分について、次のことを確認しておかなければならない。ここで、「YによってXを示す」という言い方が共通して用いられている。この表現は、ある状況を想定して用いられている。あることばが分からない人、ただしそれが何かを表示していることは分かっている人に、「Xとは何か」と尋ねられるという状況である。「YによってXを示す」とは、その人にXを教えようとして、Yを差し

出すことである。「Xとは何か」という問いかけに対する答えはYであり、その答えを得て問い手が「Xとは何か」を知るとき「教える」あるいは「学ぶ」ということが成立する。このような対話的構造の中で、「示すこと」は、「教えること」あるいは「教えようとすること」と同義である。

すでに述べたように、じっさいの議論はその大部分が、「しるしによってしるしを示す」場合と、「しるしによってことがらを示す」場合とに、費やされている。しかし、「しるしなしには何も教えられない」という結論を導くために重要なのは、じつは「ことがらによってことがらを示す」場合である。われわれはまず、cの部分から見ることにしよう。

第三章　ことがらによって示す

a、bについて論じた後、先の同意の再確認を求めて、「問われてすぐ行うことのできることはすべて、しるしなしに示すことができるか」と問うアウグスティヌスに、アデオダトゥスは先の答えを修正し、「しるしなしに示されるのは、話すことと教えることだけである」と答えている。これに対しアウグスティヌスは、「教えることはしるしを用いることなしにはできず、話すことはそれ自体がしるしであるから、しるしなしに教えうることはまだ何も見つかっていないことになる」(二〇、三〇)と指摘する。ここに、「しるしなしには何も教えられない」ことが同意されたことになる。

なぜ、アデオダトゥスは先の意見を翻し、問われた後ただちに実行できること、たとえば「歩くこと」についても、しるしなしに教えられないと答えたのであろうか。その理由は次のように説明されている。「歩くとは何か」と問われ、歩いて見せたとしても、自分が歩いただけ歩くことが歩くことであると相手は考えるかもしれない。しかしもしそのように考えたなら、誤っていることになる。教えなければならないことは、アデオダトゥスがこの直後に用いている表現を借りるなら、ことがらの「全体」である。しかし、相手に見せることができるのは、ことがらの全体ではありえない。したがって、ことがらをことがらによって教えることはできない。アデオダトゥスが先の意見を翻したのは、教えるべきことXと、それによって教えることYとが、「歩くことによって歩くことを示す」というように、

同じことばで表現されてはいるが、厳密には同じことがらではありえないと気づいたからである。

ここに、ことがらをことがらによって教えることはできないことが同意され、アデオダトゥスは、しるしなしには何も教えられないと結論する。それは、先の三区分からすれば、ある意味では必然的な帰結である。先の三区分は、「何によって示すか」という観点から見るなら、「しるしによって示す」場合と、「ことがらによって示す」場合との二区分に他ならず、「ことがらによって示す」可能性が否定された以上、残されている可能性は「しるしによって示す」場合だけだからである。しかしながら、「ことがらによってことがらを示すことは不可能である」ということから、「しるしによって教えることは可能である」ということは帰結しない。では、「しるしによって示す」場合を論じた、a、bの議論の中で、しるしによって教えることができると確認されていたであろうか。じつは確認されていないのである。なぜであろうか。a、bを論じた箇所に立ち返って考えてみよう。

第四章　しるしによって示す

「しるしによって何かを示す」場合、示されるXと、それによって示すYとが同じでないことは明らかである。それにも関わらず、なぜ、YによってXを示すことができるのか。アウグスティヌスは次のように考えているものと思われる。「YによってXを示す」という場合のYがしるしであるとき、「示す」ことは significare する（signum を作る）ことである。この時、XとYとの間にも、YがXを significare しているという関係が成立している。したがって、Xを significare しているYを見出すことができれば、そのYによってXを示すことができる。「しるしによってしるしを示す」場合についての論は、いささか錯綜している。アウグスティヌスの戦略が明らかとなるような仕方で、この箇所の論を再構成してみよう。出発点は「Xとは何か」と尋ねられて答えることにあった。ただし今の場合、問われているXは、しるし、すなわちことばである。より正確に言うなら、「X」と表現されていることはことばである。具体的にはたとえば、「名」、「ことば」、「呼び

名」といった語について、「何を表現しているか」と問われた場合である。今われわれは「表現している」と言ったが、アウグスティヌスはこれを significare という語で表す。ことばについて何かと問うことは、ことばが何を significare しているかを問うことである。「名とは何か」と問われるなら、普通に予想される答えは、「ロムルス、ローマ、徳、川など」のように、名の実例を挙げて答えることであろう。すなわち、アウグスティヌスの用語法に従えば、「名」が significare していることは、「ロムルス」、「ローマ」、「徳」、「川」などであると答えることであろう。しかしこの場合、「ロムルス」、「ローマ」などが「名」を significare しているとは言えないし、「ロムルス、ローマ、徳、川によって名を significare している」とも言えない。したがって、「名」を「ロムルス」、「ローマ」、「徳」などによって示したことにはならない。「しるしによってしるしを示す」ことが成立するために、Xというしるしが Y というしるしを significare しているだけでなく、Y というしるしも X というしるしを significare しているのでなければならない。それゆえアウグスティヌスはここで、相互に表示し合うしるしを探求するのである。

この一連の論の中でアウグスティヌスが significare という語を、異なった局面を表すために用いていることは確かであるが、この問題は今は問わない。われわれがここで注目することは二つある。一つはアウグスティヌスがことばの significare するものを、res とは呼んでいないことである。このことは、アウグスティヌスの言う「ことがら」res がストア派の πρᾶγμα あるいは σημαινόμενον のように、しるし σημαῖνον と対をなす概念ではないことを示している。アウグスティヌスの言う res とは何か、という問いはわれわれの考えるべき課題の一つである。

もう一つは、X と Y との関係を表すために用いられる significare が、当初意図されていた意味での「示す」monstrare とは基本的に異なった場面でも用いられる語であるということである。示すという語が最初に用いられたとき、それは「X を Y によって示す」という形で用いられていた。示すのは、「X とは何か」と問われて、答える人である。しるしによって答えるときには、答え手が X を Y によって significare するとも言われる。しかし、X と Y との関係を表現するために用いられ、「しるし」を主語とする「示す」あるいは「significare」は、人を主語とす

る「示す」や「significare」とは基本的に異なった用法であり、ここでは「教える」、「学ぶ」といった対話的関係は視野から外れることにならざるをえない。aの部分の議論の中で、「示す」という語は当初の用法から外れた用法へと変化している。

第五章　しるしと res

「しるしによってことがらを示す」場合の議論の中で、アウグスティヌスがアデオダトゥスに気づかせようとしているのは、ことばには音声であるという側面と何かを表示しているという側面の二つがあるということである。次のような論法を例に挙げる。「homo は ho と mo である。君は homo である。それゆえ、君は ho と mo である。」この論が詭弁であるのは、ことばの二つの側面を混同しているからである。ho や mo という音声には表示していることがらがない。したがってこれらの音声は単なる音声として受け取られた。しかし homo という音声には、表示していることがらもあるから、二通りに受け取ることが可能である。しかし、通常われわれがことばを受け取るときは、音声としてではなく、何かを表示しているものとして受け取る。ことばが聞かれると、表示されていることがらに注意を向けるのは自然の理である、とアウグスティヌスはいう。(九、二四)

ここでアウグスティヌスは突然とも思える仕方で、「significare されていることがらは、しるしより価値があると見なすべきであることを理解してほしい」と語り始める。ことばはことばがそのために用いられることより価値が低い。ことばがそのために用いられることとは、ことがらを教えることである。したがって、ことばよりことばを用いること、すなわち話しの方が優れており、同様に話すことより教えることの方が優れている、と主張するのである。ここにいたって、われわれはこの対話編の最初におかれていた問いが、何を意図した問いであったのかを知ることができる。『教師論』の冒頭にあるのは、「われわれは話すとき、何を実現しようとしているのか」という問いであり、この問いの答えとして、「話すのは教えるためか、想起させるためである」と同意されていたからである。話すことはことばであって res ではなく、教えることは res であってことばではないとすれば、しるしによって示すこと

が、教えることと原理的に区別されるのは当然であると言わなければならない。アウグスティヌスはしるしを与えることが教えることであるとは最初から考えていない。「しるしによっては何も教えられない」という主張は、じつは対話の最初から用意されていたアウグスティヌスの一貫した立場なのである。

第六章　内なる真理

しるしは res を教えないとすれば、res を教えるのは res でなければならない。しかし、このことがどのような困難を伴っているかはすでに見たとおりである。アデオダトゥスが指摘していたように、Y という res によって X という res を教えるためには、X と Y とが同じでなければならないと考えられたからである。ところがアウグスティヌスはこの疑問に対してきわめて簡単に、問う人が「理解力のある人なら」si ille intellegens esset という条件を付加することによって答えている（一〇、三）。すなわち部分にしかすぎないことがらを見せられて、全体としてのことがらを知ることができる人なら、部分にすぎないことを見せられて全体を知ることができるであろうと答えている。

ここで、われわれは次の問題に進まなければならない。res によってのみ res が学ばれるのであるとすれば、教えるものも res のみであることになるであろう。ここからどのようにして「教えるのは内なるキリストのみである」という結論が導き出されるのであろうか。「しるしによっては何も教えられない」ということから「教えるのは内なるキリストのみである」という本書の結論を導き出すアウグスティヌスの論理は、じつは微妙である。しるしによって教えられるものは何もないと確認した直後に、アウグスティヌスは「いかなるしるしもなしにそれ自身によって示されるもの」は数多いとして、「太陽やすべてに降り注ぎ装いを与えるその光、月や星の数々、大地や海、その中に生まれる数知れぬものを、神と自然はそれ自身によって見せ、示しているのではないでしょうか」（一〇、三）と言う。「それ自身によって示される」per se ipsa monstrentur、「それ自身によって見せ、示す」per se ipsa exhibet atque ostendit とは、ことがらがその同じことがらによって示されることを強調した表現であろう。ところがここでは、そのように res を res によって示すものが、「自然と神」

であると言われている。太陽や月の場合、自然が太陽をそれ自身によって示すということは、太陽がそれ自身を示すということと同じ意味であるとも解釈されよう。ところがさらにアウグスティヌスは同じ主張を繰り返し、「何かをわたしに教える人とは目や身体の感覚、あるいは精神にわたしの知りたい res を差し出す人である」（二、三六）と言う。教える「人」という訳は問題があるかも知れないが、ここで用いられているのは男性形の指示代名詞であり、教えられるres とは、明らかに区別されている。res によって res を学ぶという事態は、どのような局面において教えられるresとは区別された「教える人」を必要とするのか。この箇所は「わたしの知りたいresを差し出す人」という一般的な表現で「教える人」を規定している。しかし、それがまもなく述べられる「教えるものは内なるキリストのみである」という主張を意識した発言であることは明らかであろう。

「知性認識することのすべてについては、外に声を発して語る人にではなく、内で精神を統括する真理に相談するのであり、ことばによっては相談するように促されるだけであろう。De uniuersis autem, quae intelligimus, non loquentem, qui personat foris, sed intus ipsi menti praesidentem consulimus ueritatem, uerbis fortasse ut consulamus admoniti. 相談を受けるものが教えるのであり、これは内なる人に住むと言われるキリストである。」（二、三八）さらにこの節の終わりでは、「見られうるものについてわれわれは、それをわれわれが見ることのできる限りで示してくれるよう、外なる光に相談するということをわれわれは認めているのである」と言われている。内なる真理を論じた箇所では、知性認識と感覚認識とが区別され、並行して語られている。この並行関係を手がかりに内なる真理の役割を考えてみよう。内なる真理は、見られうるものの場合の光に当たる。では見る場合の「見られるもの」にあたるのは、知性認識されるものの場合、どこにあるのであろうか。それについて明確な記述はないが、やはり真理においてある何か、真理とともに認識される何かであると考えなければならないであろう。とすれば内なる真理は、知性認識において二重の役割を果たしていることになる。一つは「認識される res」という役割であり、もう一つは、感覚の場合の、感覚されるものとは区別された光のように、認識される res とは区別された何ものかとしての役割で

ある。

res を res によって認識するため、なぜ res 以外に光が必要なのか。次のような解釈をあらかじめ退けておかなければならない。XをYによって知る場合、XとYとは完全に同じものではない。アデオダトゥスが指摘していたように、問われているXは全体としての res、それによって示すYは部分にすぎない res であった。このことから、光になぞらえられる真理の役割は部分にしかすぎないYを見て、全体としてのXを知ることを可能にする役割である、とする解釈である。このような解釈はアウグスティヌスのものではない。なぜなら、このような解釈はすでに「res によって res を知ることができる」とされたときに退けられていた解釈であり、しかもアウグスティヌスは、真理に照らされているとしても、そこで必ず正しい認識が可能になるとは考えていない。人は自らの力に応じて光をとらえる。これはアウグスティヌスが繰り返し強調していることである。さらに、『教師論』の中に明確な記述はないが、それによって示すYとそれを示すXとが異なるのは、感覚認識の場合だけであり、知性認識されるものの場合にこのような相違はないと考えられる。

第七章　認識の成立過程

認識における光の役割は何か。このことを考えるための手がかりを与えるのは次のことばである。「色については光に、身体を通して感覚するその他のものについてはこの世の元素とか感覚される物体、またこのようなことを知るために精神が仲立ちとして用いる感覚そのものに、……相談する。」（三、三九）内なる真理は、見るときの光に当たる。しかし感覚によって知られるのは「見られうるもの」だけではない。視覚以外の感覚について、アウグスティヌスはこの世の元素、感覚される物体、感覚そのものを相談を受けるものとして挙げている。一見奇妙に思われるこのことばは、アウグスティヌスが視覚における光に、どのような役割を与えようとしているかを告げているように思われる。感覚される物体も「相談を受けるもの」に含められていることにまず注目しなければならない。このことは、視覚の場合の光が、認識される res と原理的には区別されながらも、ある局面においては res と明確に区別しがたいものであることを意味しているであろう。さらに感覚そのものも、

ここでは相談されるものに含められている。ここで認識は、最終的には精神の働きとして理解されており、感覚は認識を表すことばとしては用いられてない。認識が成立するために必要な一つの過程として理解されている。「この世の元素」という語は、解釈を確定できないが、あるいは感覚されるものから感覚まで、「知られるべきこと」を伝達する物質としての四元素のことであるかもしれない。感覚の成立をそのような仕方で説明する感覚論のあったことをわれわれは知っている。感覚に「精神が仲立ちとして用いる」という形容が与えられていることに注目しよう。ここに挙げられているものはいずれも、認識されるべき res の在り方を、それが精神に伝達されるまでの過程で担うものであると考えられる。そうであるとすれば、この箇所は、事実としての認識の記述ではなく、認識という事実がどのような段階、経路を経て成立しているかの分析的説明であると見なさなければならない。光の役割は、事実としての res の認識とは区別された何らかの認識ではなく、res の認識が成立する過程の中に求めるべきであり、res の認識を構成している一つの要素であると考えられる。

感覚されるものについての認識をさらに説明してアウグスティヌスは言う。「感覚的なものについて問われたとき、もし感覚されるものが現前しているなら、たとえばちょうど新月を見ているとき問われるなら、どのようなものでどこにあるかを答えるでしょう。この時、問うた人が見ていないなら、ことばによって信じるか、あるいはよくあるように信じないかである。しかしいずれにしても自分で言われているものを見るのでなければ学ぶのではないし、見るときにはことばによってではなく、ことがらそのものと感覚によって学ぶのである。なぜなら、見ている人に響くことばも、見ていない人に響くことばと同じことばだからである。これに対し現に感覚しているものではなく、かつて感覚したことのあるものについて問われるなら、ことがらそのものではなく、ことがらから刻印され記憶にゆだねられた像を語るのであり、偽なるものを見ているのにどうして真を語ることになるのか、それを見ているとか感覚しているとかではなく、見たとか感覚したとか語るのでないとすれば、わたしには分からない。」(二、三九)

〈res→この世の元素→感覚→精神〉。このような経路で認識が成立するのは、感覚される res が現前しているときである。res が現前していないときにも一種の認識は

成立する。しかしその認識は、〈res の記憶像→精神〉という異なった経路で成立している。このような説明は認識しているということを、そのつど現前する何らかの res の認識として理解しようとする説明に他ならないであろう。感覚しているときの認識は、感覚に現前している res の認識であり、感覚していないときの認識は記憶に現前している記憶像という res の認識である。このように、認識されるものとして、現前する何らかの res を措定するのは、知ることは res を知ることであるとする立場からの必然的帰結である。

ある認識がどのような経路を経て成立しているかを解明することは、その認識がどのような res の認識として真であるかを解明することに他ならない。アウグスティヌスが光によって説明しようとしているのは、認識が真であることの根拠である。したがって光は真理なのである。感覚認識とは異なって、res と精神との間に介在するものがない認識においては、認識される res と認識の真である根拠とは別のものではないことになろう。知性認識の対象となるものについて、次のように言われている。「これに対し精神によって見ていること、すなわち知性ないし理性によって見ていることが問題になるとき、わたしたちが語るのは内なる真理の光の中で現前しているのを見ているものであり、内なる人と言われる精神はこの光に照らされ、この光を享受している。」（二、四〇）

第七章　知と信

認識はすべて res の認識であり、res の認識として真である。ではなぜ、res の認識と認識が真であることの根拠とを分析的に区別する必要があったのか。次のように考えることができる。認識はすべて、res の認識としては真であるが、その認識をどのような res の認識として語るかは、別の問題である。記憶された res についての認識を、感覚された res の認識として語るなら、語られたことは偽である。res を認識しているということと、どのような res の認識であるかを自覚しているということとは区別しなければならない。どのような res の認識であるかを自覚させるのが光としての真理であり、自覚の契機は res の認識において同時に与えられている。しかし認識しているなら、かならずどのような res の認識であるかを自覚しているとは

とは言えない。したがって、認識者と真理との関係は、「相談する」consulere という、非必然的な関係を表す語で表現されているのである。

われわれは、アウグスティヌスにおいて、一人称の明示された「知っている」こと、すなわち自覚された知っていることと、この意味での「知っている」ことの前提として分析的に認められる認識とを区別しなければならないであろう。「わたしが知っている」とは、どのようなresが認識されているかの自覚をともなった認識である。自覚という在り方において真理に関わる認識である。アウグスティヌスにとって「知る」ことが、対話的構造の中で捉えられていたことを思い出さなければならない。対話的構造の中で目指される知は、ちょうど『ソリロクィア』で理性が、「しかしまず、どのような仕方で神が君に示されたなら、君は、十分ですと言うことができるのか、説明してくれたまえ」と言っているように、自覚された認識としての「わたしの知」なのである。知についてのこのような理解が、どのような射程を有するかも、すでに引用したテキストに示されている。アウグスティヌスは知を語るとき、信との対比を強く意識している。知は res が知られていることの自覚をともなっている。これに対し、信においては、res の知られていないことが自覚されている。アウグスティヌスは知の概念を信との対比の中で確立しようとしているのである。

＝討　論＝

加藤信朗

De magistro の微妙なニュアンスを含んでいるテキストを読み分けてゆく、中川さんの思索の筋がある形で示されたご発表であり、いわゆる「照明説」と言われてきたものと、「意味論」と言われてきたものとの関連といった展開において、問題が動いていたように思う。そういった中で、とりわけ知の問題が自覚というところで抑えられているのではないかというのが一番大きな筋であると拝聴した。いわゆる consultatio, consulere の問題――admonitio の問題は直接には触れられなかったように思うが、この二つは互いに組み合わさったものだとは思う――など、中川さんの定められた視点が非常に鋭いかたちで示されたように思った。ではディスカッションに入りたい。

加藤武

多くのことを教えていただいたご発表であった。わたしにとって De magistro は、時間的に De doctrina christiana への延長線上というか、De dialectica と De doctrina christiana の間の著作として位置づけることができると思うが、今のご発表は De doctrina christiana との関係を考えた場合に、随分違うという印象を受けた。

私の質問は一つの点に関してである。第六章のラテン語の引用文 'verbis fortasse ut consulamus admoniti' のところで、訳は「言葉によっては」とされている。ここで verbis は negative な意味で、つまり foris と intus と言う対立において、外的ということが negative な意味で捉えられているのではないかと思った。その場合 admoniti とか consulere とか――consulere については第七章で「非必然的な関係」とかおっしゃって、これは微妙な言葉であるというご指摘があったのだが――、以前からのわたしの問いとして「consulere とは一体何であるのか」ということがある。言葉 verba の役割は否定されたのだろうか。つまりアウグスティヌスの念頭には、ここでは言語哲学的な問題が中心になって出てきているけれども、聖書解

釈学ということがあると思う。そういう意味で言うと、言葉の位置というのはどういうことになるのだろうか。あるいはわたしの漠然とした思い込みが洗い清められて、新しい目でこのテキストを読みなおさねばならないのかなとも思った。

中川純男

言葉に関しての問題を重視していないのは、避けたということもあるけれども、一つはアウグスティヌスの力点に則し、この著作の中で彼自身が語っていることに則して論じたことにもよる。知るということを考えるときに、いつも信と区別された知というかたちで考えられているという点は言えると思う。ただその枠の中で、「教える」ことはどちらかというと知の方の働きであろう。アウグスティヌス自身も「言葉の機能というのは重要だが、ここでは傍らに置いておく」と言っているので傍置したわけだが、もちろんこれがアウグスティヌスにとって重要でないとは考えていない。ただ言葉のことを言いだすと、例のややこしい箇所、「言葉によって言葉を significare する」という――ここは普通は批判的に扱われ、significare という言葉の多義性をアウグスティヌスは混同して使っているというふうに言われるが――困難な箇所が出てくる。私が読むかぎりでは、significare が様々な局面で使われていることは確かであるが、混同されているとは言えないと思う。そこを追究すればあるいは signum の重要性を理解することにつながると思うが、そこまで力が及ばなかった。

加藤武

consulere とはどういう意味であろうか。

中川純男

ここでは知の方に焦点を当てたために「必然的に知が与えられるわけではないが、与えられる可能性だけはそこに開かれている」と解した。

加藤武

感覚の問題に関して、あるいは裁判の用語で「諮問する」という用法が出てくる。法廷用語であると思うが。

中川純男

アウグスティヌスが設定している問題と結局同じだと思うが、何かまず問題を持っていかないと、consulere することにならない。「これは何か。どうだろうか」と問題を持っていって答えを求める。

加藤武

そういう意味で、対話ということになるのであろうか。

中川純男

そう。ただ答えが与えられても、知ることに関しては、こちら側の学んだということに直結するわけではない。

加藤武

res の意味内容に関して、アウグスティヌスとアデオダトスの理解の間にずれがあり、アウグスティヌスでは可知的、アデオダトスでは不可知的というふうに、ずれの中にも対応があるように思うが。

中川純男

De magistro の中では、考えていることも res、感覚的なものも res、知性認識されるものも res だと言われている。このように様々な局面の間に何か統一性がないかと考えてみると、結局「知られるもの」が res だということになるのではないか。アウグスティヌスが「知っている」というのは、単純にわれわれが何かを分かったという場合の「知る・分かる」であり、それが原型的な理解として出発点にあると思う。

神崎繁

いま、加藤先生がお聞きになったのだが、お答えの中で res の中に在籍しているものの種類が非常に多様だと言われた。そのことについて、質問として一つは、最初に出だしのところで分析されたウェルギリウスの詩句から取られたところで、中川さんはexだけを例に挙げられたように思うが、アウグスティヌスの分析は si と nihil とexと詩の順番に沿ってなされている。その間でも res の身分に当たるものはずいぶん違っていて、一つは si に関して言えば、dubitatio というのであろうか、疑いを示しているの

ではないか、条件文の si が何を示しているのかと言われると、アウグスティヌスが「普通は何も指し示していないはずだが、敢えて〈何か?〉」とアデオダトスを問い詰めていくと、アデオダトスはあるいは苦しまぎれにそれは dubitatio だと言う。これは当時の文法理論を前提にしていて、si というのは疑問を表す接続詞だという当時流布している文法書の規定があり、これをアデオダトスは苦しまぎれに使ったのではないかと思う。nihil に関しても、nihil が何をしめしているかという問いはメタフィジカルな問題になるが、nihil でわれわれはあることを理解できるのに、それを示すことができない。そこで取り出されるのは affectio animi という形で、心のある種の様態を指し示す、当時の文法理論の感嘆符の説明の中に、affectio とか affectus という語が使われていて、それをアデオダトスは使ったと思う。ex の説明に関してはdeに置き換えて説明している。

以上のように、ある意味で res を指し示して、signum が res に代えられて説明される場面が出てくるように、最初から res の身分は随分多様性を持っている。その中で res を指し示す身分の確定ということは大きなことだと思う。今のご説明で res とは知られるものだとまとめられたが、その間には随分大きなプロセスが必要だし、アウグスティヌス自身がそれをやっているのではないかと思う。

まずうかがいたいのは、ことがらの中にはいってくる「存在者」とも呼ぶべきもの、身分がアウグスティヌスの中でどのようになっているのかということである。さっきのお話だと、何でも入るのではなく、ある種の秩序はあったのではないか。

関連してもう一つ。仮に res というのは規定性をもっていて、仮に「知られるもの」だと説明されるとしても、裸のままで res を知ることはできず、かならず何かとして規定性は持っているように思う。その規定性とは、ひるがえって言うと「結局言葉で与えられなければ規定できないものになる」とすれば、res を何かとして知るというところも——その場合の「知る」が scire なのか intellegere なのかという点もお聞きしたいのだが——、res を「何かとして」という点が必要だと思う。それは中川さんが結論としては、12 頁で「〈しるしによっては何も教えられない〉という主張は、実は対話の最初から用意されていたア

ウグスティヌスの一貫した立場であった」と言われていて、これは色々な論者が取り上げているように、どうしてそういう否定的な問題を非常に長く前半で取り上げて、後で実はそうではなかったというどんでん返しが起こるのか、いろんな人々がその理由を説明しようとしている。中川さんの場合、それが少し呆気ないかたちで最後へと繋がっているように思う。私自身としては、アウグスティヌスは言葉に対して思い入れを残してきたと思っている。そのとき、それがどう残ってくるかと言うと「しるしによっては何も教えられない」と言うとき、「言葉の意味というのは「真理」とか「知る」(intelligere) に裏打ちされなければ、最終的には説明できない」という形の構造を持っていると理解している。

その点に関して、仮に「res は res 自体によってわれわれに知られる」ということがアウグスティヌスの結論だとしても、その res は何か規定性をもってしかわれわれは理解できないとすれば、その規定性の中に、何か言葉でしか表現できないようなものが入り込んでくるという余地があるのではないだろうか。それが二番目の点である。

第三の点として、同じ第五章に De magistro 冒頭の「われわれは話すときに何を実現しようとしているのか」(efficere velle) という箇所がある。中川さんのご説明では、signum というのは何か signum が使われるその意図がはっきりしなければ、signum がどう使われているかわからないという風にもうかがえる。これも加藤武先生が言われた、De doctrina christiana では voluntas という概念が「記号を使う意図」として出てくる。そしてどういう意図のもとに記号が用いられるのか（現代流に言えば intention とかそういうもの）が問題にされるのだが、そこでのわたしの理解では「どういう voluntas であるか」、その意図を確定するために、「significabilia」＝「指し示されうるもの」という言葉でアウグスティヌスが敢えて示したものによって、理解の基礎が言語的に最後は言語で表現されうる規定性を考えている。

signum は不完全であって voluntas が必要だとか、De magistro の中で intellectus として説明するにせよ、どちらでも同じ構造をもっていると思うが、そういう規定性がないといけないと思う。そしてそれは内的な形で言葉の問題につながっているように思う。

中川純男

全部にお答えできるかどうかわからないが、De magistro の最初の議論に関して、si か nihil とかが「何を significare しているか」という問いにあって「何を」の部分が res であるというとらえかたであるが、表示されるもの =res だとアウグスティヌスは考えていない。それは例えば、nihil は affectus animi を表示していると考える可能性について、res でなくて affectus animi を表示しているとすればどうかという発言のように、signum や verbum の対概念として、あるいは言葉の意味として res を捉えるという方向を取れないような文脈が出てくるからである。significabilia「表示されうるもの」をアウグスティヌスは「signum になりえない res 」と規定している。significabilia は用語としてストア起源だろうけれども、理解にはズレがあると言わざるをえない。

「言葉の意味というものがどこかで intelligere というものに裏打ちされる必要がある」とおっしゃったが、それはその通りであろう。そしてそれこそが「知る」ということに他ならない。ただそこから先の言葉の扱いが問題である。わたしもはっきりと確定した解釈をもっているわけではないが、ある意味で『教師論』におけるres の概念ははっきりしていないが、『三位一体論』では明瞭な形を取り、『教師論』でres に割り当てられた役割の一部は、内なる言葉に割り当てられることになる。「それがあるからこそ〈外なる言葉〉が意味を持つ」ところの内なる言葉が『教師論』では res と呼ばれることがある。『三位一体論』では内なる言葉の、さらにその向こうにres がある。ただ「知るということは res を知ることである」と言うとき、差し当たっては、res は「知られるもの」という規定以上の規定を必要としていないものというところでおさえてよいと思う。そこに「われわれの気持ち」とか「命題によって表されること」とか様々なことを代入してもよい。ただそういう具体的認識、「わたしが××を知っている」という形での認識は「いかなる res を知っているのか」という問いの答えと見なすことができるのであり、だから規定性は探究されるべきものだと思う。それをきっかけにして、そういう形で入っているのではないか。

それから「意図」に関しては正確には理解しえていないと思うが、De magistro 冒頭で何を efficere しようとしているかと言われているような場合は、ここでは後から出

てくる propter ～というような目的性が表されていると思う。その目的性と言葉を語る場合のインテンショナルな意志とは、ちょっとまだ距離があるような気がする。

神崎繁

確かに今仰ったように、De magistro 冒頭の velle と、記号として用いられる De doctrina christiana の voluntas とは距離があると思う。ただ、記号はそれ自体としてどういうコンテキストで、どういう意図で用いられるかという点では広い意味ではつながっていると思う。ただその前の点であるが、中川さんが「res によって De magistro を読みたい」という意図はよく判ったのだが ――それはやっぱり res／ものによって知るという目的を目指していると思うのだが ――、ただそのときに res が指し示しているものが何かという問い自体は、De magistro の趣旨から言えば、アデオダトスが陥ったような立場になるかも知れないが、やはり重要だろうと思う。

加藤信朗

いまの神崎さんの問題点とも関連があるのだが、加藤武さんのところに戻って、緩いコンテクストでわたしの気になっていることをうかがって中川さんのお考えをお聞きしたい。わたしも最近中期のものを読んでおらず、随分難しいなと驚いている。この時に彼が聖書を読み始めていただろうということは確かだとして、この長々とした議論は一体何なのだろうか。カッシキアクム著作では、時々聖書の言葉が光のように輝きを放って驚かされるのであるが、この著作はそれほどではない。この著作の議論は一体何なのかを考えていて、それで結局問題は、verba と res と veritas という、最初に中川さんが問題にされた3つのものの周りを回るのであろう。さきほど加藤武さんが仰った verbis fortasse 以下のところは、訳文では「だけであろう」となっていて、この「だけ」がどこから出てくるのか微妙だが、やはり verba と res と veritas の連関が気になってくるところではある。

Confessiones を読んで最初にぶつかるのは、弁論術を教えるときの「虚偽をひさぐ」という激しい言葉である。彼にあっては mendacium と veritas は非常にはっきりと対立して使われている。であるから、最初に出てきているウェルギリウスその他の解釈にしても、最初のところは

弁論術の教師が教えるかのように、Oratio の部分がいくつあるかということを問題にしたような部分もあるが、そういう文法論・言語論などは res にぶつからないということが前提となる。では res にどこで触れるのかを「実際に示してみせる」と語られる。結局ただ彼が前提にしているのは、やっぱり『ダニエル書』から引かれているような聖書箇所が何を言っているのかを、どう理解できるのか、そこで示されている res そのものに一体どこで触れることができるのだろうか、ということであろう。するとこの書物は、まさしくアウグスティヌスの「解釈論」のまず initium に展開する基点を作っているのかも知れない。中川さんがおっしゃった知と自覚の構造には大賛成であるが、その周りにあるところのものはそれでもあるのではないかと思う。ならそれらをどのように関係させて抑えればよいのか。

質問にすると、アデオダトスの最初の loqui ということに関して、中川さんは対話ということを残されたように思う。アデオダトスは loqui から出発したときに、何が達成されるかと言えば、docere と discere の両方を挙げた。だが discere の話は、まず最初は全部すっ飛ばされる。なら discere とはどこで始まるのかと言えば、最後の結論の所で、アデオダトスがまとめたときの言い方に、verba が頻出している。キーワード discere がアデオダトスの結論に出てきて「あなたの言葉に促されて、わたしは学んだのだ」とある。これをアウグスティヌスがネガティブに使っているとは考えられない。愛する子が最後に何か分かってくれたこととして語っていると読みたい。内容は verbis, ut discat「学ぶようにと人が促されるだけのことだ」ということを「あなたの言葉に促されて、わたしは学んだのだ」と非常に強調された言葉が使われている。

であるから、内に住む veritas というものはもちろん重要なもので、それへと導かれるのだが、verba は相当重要な役割を果たしているのではないか。その前でも「探究するように admonere される」とあって、探究のモメントとして admonitus が出てきている。中川さんは今回はどちらかと言うと、影の方に置かれた「verba admonitus quaerere, そしてconsulere, discere」という形で、ちょうど裏側になるのではないかという面から論じられた。そういったことを踏まえて、この書物全体の意図を含めて、中川さんのお考えをお聞かせいただければ。

中川純男

今指摘していただいたことに関しては、まったく同感である。アウグスティヌスがアデオダトスに聖書の読み方を教えているという面はある。ただそこで、一方では知るということの厳密性を要求してゆくが、それと同時に探究を促す言葉の役割というものも、ちょうど紙の裏表のような形で強調されてゆくということは確かであろう。知が信ずることと裏表の関係にあると結論のところで述べたが、信とは探究してゆくような信であり、知よりステータスが低い認識として「信」である。また「教える」、「教師」ということに関しても、促す教師がいるということは否定されていない。

神崎繁

docere と discere の区別に関連して、中川さんが res を知るということを強調された際、その場合知るということは、scire の方に傾いているのではないかという懸念を抱いた。docere は scire ないし scientia を伝授するということを前提とするのなら、discere というのは intelligere につながっていて、know と understand は随分違うことだとわたくしは思う。

scire と intelligere の区別ということに関しては、先に中川さんが稲垣先生への献呈論文集（『中世における知と超越』創文社）でもお書きになったような、中川さんご自身の思索に関係のある部分だと思うが「direct な知とその自覚」というモデルで考えておられて、今日のご発表にも最後の部分でそれが出てくると思う。いま scire と intelligere の違いを問われるのであれば、そういう「direct な知とその自覚」というモデルで考えられている方が scire であり、全体のネットワークの中でものを把握している状態が intelligere であろう。

中川純男

ダイレクトな方が scire であろう。ダイレクトと言うのは対象の直接把握というような意味であろうか。

神崎繁

対象をそのまま掴んでそのまま把握するという意味である。主に焦点の当て方の違いかも知れないが、事柄をその対象との相対的な関係から独立させて把握するということ

であろう。

中川純男

指摘されていることは、わたくしがこれまで繰り返し言っているような問題が今日も語られているのではないか、ということであろう。ただ御指摘のような知の区別を scire と intelligere, discere と docere という言葉に割り振ることは、『教師論』では多少無理があろう。

神崎繁

考え方のある方向性の違いを浮き立たせるために過ぎないのだが、どの図柄で読むのであろうか。

中川純男

intelligere は様々な局面で使われており、『教師論』の使い方とその他の初期著作とでは、まったく同じ局面で使われているとは言えない。『教師論』の中では、intelligere と sentire との区別は「分析的説明」というコンテキストの中で出てきて、「感覚が感覚する」といったような表現も、そのような分析的コンテクストの中では可能である。けれども感覚を通して精神が学ぶと言われる場合には、感覚認識であろうと知性認識であろうと同じ「知ること」scire である。ゆえに用語法としては他と違うかも知れない。scire に関しては、確かにアウグスティヌスは微妙な使い方をしているように思う。一つは対象に関わるところ、もう一つはアウグスティヌス独自の使い方で、それは『教師論』の終わりの方の、例えば「学ぶことは何もない、最初から自分が知っているか知らないかどちらかである」と論じられる箇所で出てくる。相手の発言を真であると知っているか、偽であると知らなくはない、と言われている。知るのは真であることを意識しつつも、偽であることを知っているという言い方を認める方向に強く傾いている。明らかにアウグスティヌス独自の方向に進んでいると言える。

柴田有

「しるしがしるしを示す」というときの示し方はどういうものかということを考えていた。例えば『創世記』でアダムが動物に名前を付けてゆくような場合の「レッテル・代行機能としてのしるし」がある。同じように「しるしが概念を示す」とか「しるしがしるしを示す」といった場合

に、示す相手が、記憶の中にか眼前にか知らないが何らか現前しているというような考え方で、「しるしがしるしを示すに過ぎない」という言い方が出てきているのかも知れない。つまりその段階でアウグスティヌスは現前の形而上学というか、言葉に対して指示物が何らか現前しているという前提を設けているのだろうか。それともその段階でもしるしとか言葉を使うということを、しるし（言葉）によって存在が新たに作り出されていくようなしるしとして考えていたのだろうか。そのあたりをどうお考えか。

中川純男

難しい。今日お話した範囲でお答えすると、言葉に見合ったものが現前しているということ、それは「知る」という場合に強調される点である。「現前」という言葉として praestat とか adfuit とかが出てくるが、言葉であるしるしを聞いて、それに見合った res を知っている、それが言葉を知っていることであるという点が強調される。言葉が何か探究を促すとかということも、広い意味で何かを作りだす一部だろうが、それがどういう形でおこるのかはわからない。それは加藤武先生あたりから教えて頂きたい。しるしというものがまったくネガティブなものであれば何も作りだすことはないであろうが、実は探究を促すという機能がある。それはどうして果たされるのだろうか。

柴田有

しるしに対してしるしの相手がまったく現前しているのであれば、ノモス化したというか、制度化したというか、そういった状態なので、そこから res への立ち上がりが促されるべくもないと思う。だからその時点での言葉の「示す」がどうなっているのかをお聞きしたいと思った。

中川純男

やっぱり「知っている」ということがそこでは重要であって、知っていることがあるからこそ知らないことの探究へと促される。それはアウグスティヌス風に言えば「何か知っていることがなければ信じることもできない」ということである。これはある意味で常識的なところから出発した論だと思う。だから「これは何ですか」と聞いた場合、相手がまったく頭が白紙であったならば、聞いたことをそのまま信ずる以外にはないであろうが、実際の場面は必ずしも

そうではない。何かおかしいのではないかとリアクションを示すことができる。例えば留学生が「机とはなんですか」と問うた場合、それに対して「四本足の毛のふさふさした動物である」と答えるというような意地悪な返答をした場合、相手は信じるかも知れないが、疑うかも知れない。アウグスティヌスはそのあたりからものを考えていると思う。それ以上のことはお答えできない。

渡部菊郎

中川さんは res をかなり広く取られていて「知ることは res を知ることである」と強調されていたが、intellige-re するときに、相談する真理とか光といったような関連で、res と ratio の関係をどう考えておられるのか。

中川純男

「内なる真理に照らされて知る」といった表現は頻出する。そのとき真理という言い方もするし、ratio aeterna といった形で（単数も複数もある）表現されることもある。その ratio が問題で、真理というものが、単に判断の根拠とのみ考えられているならば、ratio は使えないはずである。何か認識されるものがあり、それとは別の根拠が真理だというのではなくて、真理そのもののなかにある程度認識されるものが含まれている、とアウグスティヌスは考えていたのではないかと思う。可知的なもの・感覚的なものという区分はデリケートな問題を含むが、感覚されるものの場合の対象のような役割と、光のような役割との両方を、真理とか内なる光は持っているのだと思う。

渡部菊郎

そうするとやはり「ratio において res を知る」ということに強調点があるとお考えであろうか。単純に物を知ることと、ものの意味とか根拠を知るということに分けることができるかも知れないが、ここでアウグスティヌスは res を ratio において認識するということに強調点を置いているのだろうか。

中川純男

ただある場合には ratio そのものが res である可能性がある。その場合 res は純粋可知的なものになる。res をそこまで広く取りたい。

荻野弘之

15〜17頁あたりにかけて、最後の第7章のところで中川さんは駆け足でお書きになっているような印象を受けた。大切な問題がいくつも含まれているので、必ずしも最終的なお考えが定まっていないということかも知れず、もしそうならば見通しで結構なのだが、うかがいたいのは、最後の17頁のところに「アウグスティヌスは知るということを対話的な構造の中で考えていた」とある。基本的には賛成だが、もう一歩ふみ込んで、対話的構造とはどういうものだとお考えであろうか。その場合に「自覚された認識としてのわたしの知」を引用されるのだが、わたしの気になっているのは、signum と verba, res, veritas という関係を考えたときに、「教える人」＝「言葉を語る人」の存在が De magistro ではどこに入ってくるのかということである。つまりレトリカの次元を考えてみると、言葉を語っている人に対する聞き手の信頼が入ってこないかぎり、説得は成り立たない。従って discere が成立するためには、そこに一種のアウクトリタスの構造が言葉のやり取りの中に入ってこなければならないと思う。わたしはおそらく De magistro では、最初の「記号の表層的な関係」から最後の「語っている人の存在の位置づけ」に移行するように思う。ある意味でそれは De doctrina christiana のなかで展開されてゆくことかも知れないし、『告白録』における praedicator の存在の意味にもつながってゆくと思う。中川さんが対話的な構造を強調されることには賛成なのだが「わたしが知っている」という一人称の明示された自覚に話をもっていった場合、対話的と言われる構造がどう残ってくるのだろうか。信と知の概念の対比に関しても、補っていただける面があれば。

中川純男

対話的構造のなかで目指される知とは、「自覚された認識としての」性格を持っていて、それが「知っている」という言葉で表されるのだと思う。「私が知っている」、そしてしかもそう語るということは、自覚された認識としての知であろう。ただそういう対話的構造が、教えるとか学ぶということとどう関係するかという点については、それは知を対話的構造の中で捉えた場合、わたしの解釈では人間どうしの間で知がやり取りされることはできないことになる。ただその場合やりとりできないのは、どこまでも「わ

たしが知っている」という形での知である。なおかつ促すということが成立するのは、指摘された通りである。そのためにはやはりアウクトリタスが非常に重要になってくると思われるが、De magistro のなかでそれは、いつもちらっと見えてはまたすぐ元に戻るという形でしか出てこないように思う。

最終的に対話的構造とは、価値的なものまで含み、さらに人格的と言ってもいいところまで踏み込む。そういう方向性はあるけれども、差し当たって言葉の一番低いところの意味で使っている。まず「知る」ということを考えるときに、優先的に頭に思い浮かぶような状況である。先に進んでゆけば人格的な関係ということも出てくると思うが、対話的構造とか「自覚された」という言葉は、色々な意味で読み込みの危険が過ぎる言葉であることは確かである。ただ私が言っているのは「わたしが知っている」という形でアウグスティヌスが知っているということを考えているということである。「知る」ということがさらに進んでゆくためには「知らない」ということを問題にしなければならず、その際にしるしとか信じるということが出てくると思う。

樋笠勝士

今日のお話は、言語論という観点からは、signum と res という二項関係でのお話だったと思う。かつて Marcus とか Jackson, Ruef などが言っていたように思うが、ストア派とアウグスティヌスを比較したときに、ストア派は二項関係だがアウグスティヌスは三項関係を言語において構造化したと言って評価したことがあった。ストア派だと究極的には「指し示されるもの」と「指し示すもの」という二項関係であるのに対して、アウグスティヌスは res と signum 以外に、例えば『三位一体論』だと animus とか cogitatio とか quod gerimus in animo とか、色々な言葉遣いをしているが、何か精神的な部分を言語構造の一項としてつくるということをやっている面がある。その際ストア派とアウグスティヌスの間にどう違いがあるかを考えると、アウグスティヌスは解釈者の存在を位置づけたと言われていたかと思う。解釈者というものは記号付与者であり記号受容者である。そういう観点から言うと10頁から11頁にかけて「しるしを主語とする示し」と「人を主語とする示し」というところでは、前者が極めてストア派的で、命題が命題を示す場合、解釈者が存在しないような場

面を想定しうる。それに対して後者は解釈学的な、中期以降のアウグスティヌスにあるような言語論を想定することもできようと思うが、そのあたりに関して、まだ『三位一体論』まで行かない初期の De magistro という著作の中で、三項関係の一角を担うようなポイントについては、例えば先ほど挙げられた nihil, affectio animi といった言葉の関連の中で、何か指摘して頂けるだろうか。

中川純男

その点に関しては、やはり方向性はあると思うが、はっきりはしていないと思う。証拠の一つは、『三位一体論』では内なる言葉に割り振られるものが、res に割り振られるという点がある。その区別は De magistro ではっきりしていない。それから res と signum の価値の上下に関して、signum は res のためにあるという議論があるが、それに対してアデオダトスは反論していて、res のほうが必ずしも価値が高いとは言えないと言う。例えば汚物のような場合がそれである。最終的にアウグスティヌスは、一歩譲って「res の知と signum の関係に置き換えてくれてもよい、res の知は signum よりは価値があると考えてくれてもよい」と言う。つまりまだ三項関係として明確に意識されていないということである。

それから10ページの指摘された箇所にあるように、signum が significare する status を res と呼んでいるという論は見つからないと思う。またその status を一つの言葉で概念化している箇所も『教師論』にはないと思う。その点はストアとは根本的に違うと思う。

加藤信朗

今日は議論も沸騰して、大変勉強になった。

第七二回教父研究会（一九九五年四月十五日　於聖心女子大学）

司会者　加藤信朗（東京都立大学名誉教授）
発表者　中川純男（慶応義塾大学教授）
発言　加藤　武（立教大学名誉教授）
神崎　繁（東京都立大学助教授）
柴田　有（明治学院大学教授）
渡部菊郎（上智大学助教授）

荻野弘之（上智大学助教授）
樋笠勝士（神田外語大学助教授）

◎討論の記録については、論旨を明確にするために、多少表現を改めた箇所があります。

パトリスティカ　第二号目次

巻頭言……泉　治典　2
アルクイヌスとフレデギスス
—文法学・論理学・神学をめぐって—
……清水哲郎　3
ディオニシオス・アレオパギテース『神名論』における新プラトン派的言語とキリスト教的言語
——『神名論』第二章を中心に——
……熊田陽一郎　38
教父研究の現在……今道友信　70
〈始まり〉の問いとその行方
——「ヘクサメロン」の西と東——
……荻野弘之　93